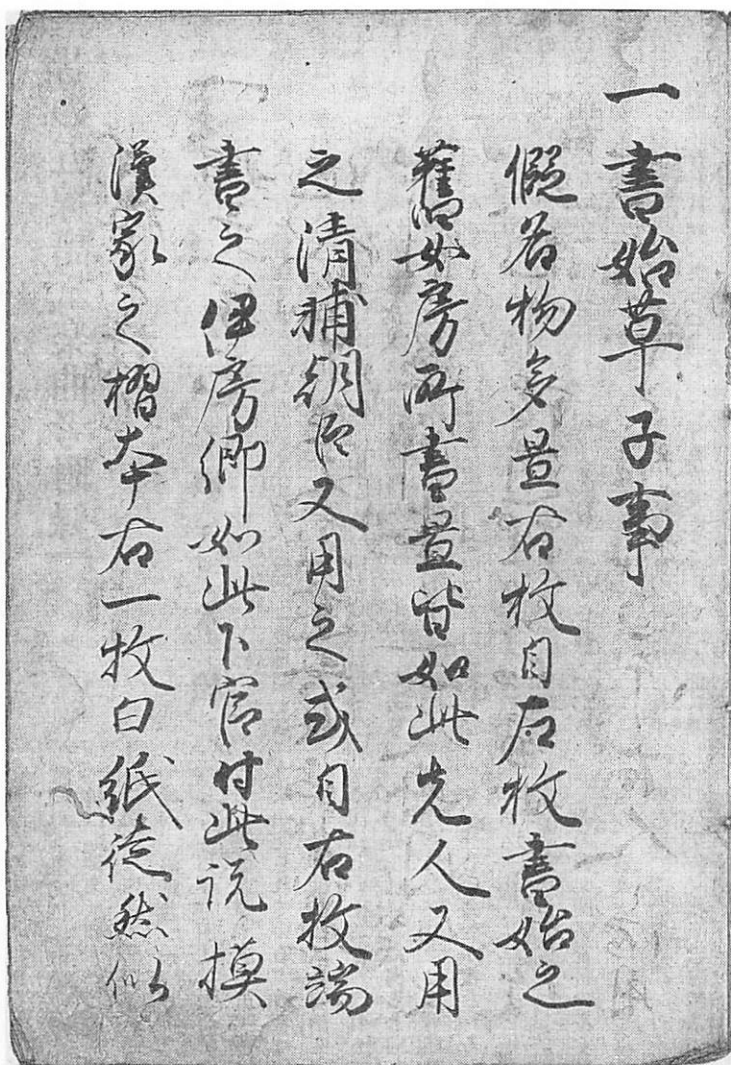


## 国文学研究資料館報

第57号

平成13年9月



正平12年写『倭歌作法』（『下官集』）巻頭（8頁参照）

編集・発行者 国文学研究資料館  
 東京都品川区豊町一六二〇  
 郵便番号 一四二八五八五  
 電話 〇三三七八五七二三  
 FAX 〇三三七八五七〇五一  
 URL <http://www.nijiac.jp/>  
 印刷 株式会社三協社

## 目次

昔の五線譜『楽考附録』—調査余滴—

磯 水絵……2

新しくなった「国文学論文目録データベース」

武井協三……4

文庫紹介35：静岡県立中央図書館（葵文庫）

齋藤希史……7

新収資料紹介47：橋本進吉旧蔵仮名遣書コレクション

浅田 徹……8

情報メディア室の現在

野本忠司……9

文献資料部事業報告

新藤協三……11

研究情報部事業報告

松村雄二……13

整理閲覧部事業報告

鈴木 淳……15

評議員等名簿

……17

彙報

……20

人事異動

……22

閲覧室利用案内

……23

平成13年秋・冬季学会開催一覧

……24

集会等予告

秋季通常展示・古典連続講演会……10

国際日本文学研究集会……10

## 田安德川家寄託資料のうちの音楽関係資料より

## 昔の五線譜『楽曲考附録』

— 調査余滴 —

## 磯 水 絵

故平野健次氏の言を借りていうならば、徳川期に入って、かの『楽家録』の直後あたりから、漢学者、ついで国学者の論楽家が現れ、大名が雅楽に興味をもつて楽書を集めるようになったという。

田安宗武（一七一五〜一七二一）もその一人で、紀州徳川家治宝の三〇〇点には及ばないが、宗武を祖とする田安德川家に所蔵されてきた資料のうちには楽書が多く存在し、当館寄託資料目録に拠ると音楽関係資料の数量は、全八二四点（四〇九二冊、三三軸）のうちに一一〇点を数え、その内訳は雅楽資料四八点、琴楽資料三九点、能楽資料二三点となる。ただし、たとえば『猿楽伝記』の背には「管絃四」と記されていて、少なくともこの前に三冊の「管絃」と認識された資料が存在していたことを

推察させるし、他に「後鳥羽上皇御口伝／後二条帝宸翰写八雲一言記／正風体抄」にも背に「和歌九」、綴じの部分に「八之内」とあり、鴻山文庫蔵の「田安本番外謡」のように流出した田安家旧蔵本も知られているから、田安家文書の全容は明らかではないが、当然現在に倍する資料が蒐集されていたろうことは想像に難くない。

また、音楽関係資料に括られずに有職故実書とされている資料のうちにも、折からの礼楽思想が反映したからか、音楽関係の記述が散見される。たとえば内閣文庫本とは同名異書の『諸家故実集』には「色々聞書諸道具制法等」に琵琶・琴・太鼓・一鼓・笛・尺八等の手渡し方、また猿楽者への物の渡し方が記され、「有職鈔」巻之三「禁中官物之篇—賢所之事—」

には、同所に収蔵されている玄上・牧馬・井手以下琵琶に始まる楽器の名物といわれるものが網羅され、巻之四「諸家ノ家業ノ篇」には「神楽」の家として「綾小路、持明院、四辻、庭田、五辻、鷺尾、藪内、滋野井」が、「楽」の家として「和琴—四辻・大炊御門—以下、琵琶、箏、笙、笛、篳篥の諸家が記されている。前者は江戸式楽、後者は前代以来の雅楽に関わる記録といえるが、これも「補訂版国書総目録」に拠ると同名異書がうちに混在している可能性もあり、詳しい調査が俟たれるところである。因みに田安本は安永五（一七七六）年の写しである。

その音楽関係資料の多くは、自身が「為楽大成」「楽曲考」「楽曲考附録」「成楽類編」「得所録」等の音楽書、礼楽思想に基づき当然音楽にも言及することとなった『玉函秘抄』等の有職故実書を編んだ宗武の蒐集にかかるといえる。宗武没後、その蒐集は田藩文庫として続けられていったと覚しい。その調査は平成二二年の当資料館寄託の田安德川家資料による諸道伝書の研究の一環として行われた今回が実は二度目で、初

回は昭和四五年五月より七月にかけて、岸辺成雄・平野健次・張世彬・上參郷祐康・三谷陽子・蒲生郷昭・蒲生美津子の七氏によって行われ、「東洋音楽研究」第41・42合併号（昭和52年8月）紙上に「共同調査報告 田安德川家蔵楽書目録—その資料的意義—」としてまとめられているが、因みにその第一回調査報告に平野氏は「この田安家楽書全体は、宗武生前に収集されたものが、そのまま遺存しているのではない。宗武の楽書収集の遺志は、嗣子治察や、遣臣長埜清良らによって受け継がれ、むしろ田藩代々にわたって続けられた収集作業の結果が、こんにち遺存する田藩文庫なのである。」と述べておられる。一人宗武だけの蒐集したものではないという観点は今回の調査結果を通覧しても明白で、音楽資料には奥に年記を有するものは稀なので他資料に拠るが、前出の『有職鈔』は安永五（一七七六）年、『類聚雜要抄』の一本は文化元（一八〇四）年、他の一本は天保六（一八三五）年の書写という具合に宗武没後の蒐集にかかっているものが多いのである。

ところで、寄託資料のうちの雅

楽関係資料についてみると、宗武の編んだ『楽曲考（うたまいのか）がなえ』『楽曲考附録』、および『得所録』が、中でも特に『楽曲考附録』が注目された。第一回調査報告に蒲生美津子氏も言及しておられるが、『楽曲考』は楽曲に關して種々の資料を参考にして宗武自身が考察したもので、既に『日本楽道叢書』上巻（羽塚啓明編 臨川書店昭和63年復刻）に翻刻・解題が収められているからここに特記するほどのものでもない前代の『教訓抄』等と同工の作品であるが、この『楽曲考附録』は違ふ。未だ翻刻もなく、羽塚氏の解題に「附録四十五巻ありて左右の舞譜、絃管の譜、打物譜並に余論を収めたり、殊に余論には卿の持論を載せ、発明の説甚多し」と説かれ、蒲生氏にも「附録で行なつたような楽譜に基づいた実践的研究はあまり例を見ない」と指摘されているように非常に興味深いものである。

この「声歌譜」はまさに昔の五線譜といふべきもので、一三丁にわたつて「詠」が譜で表現されている。半音をひとまずとして音高を七色に区切り、そこに声明の墨博士のように、歌詞の一字一字を音の高低と長さを違えて右から左に記し線で繋いでいる。その記譜法を蒲生氏は「従来我が国の伝統的記譜法では例を見ないものである。音高が明示されているので、かなりの程度再現が可能である」と指摘しておられるが、この丁に至つて突然一紙全体に七色の横縞が目飛び込んでくるのは衝撃で、いかにも豪華な大名の仕業と思わせるものがある。が、とにかく「詠」の歌詞の発声の伝承は今日失われているから、その記録としてもこの箇所は見逃ごせない。

また、能楽関係資料のうちに目を転ずると、『猿楽分限帳 全』一冊の写本が存在した。それは識語・署名・年記等奥書に類するものはなにも有していないものであったが、『国書総目録』に拠ると、同名の徳川達孝蔵本の写しが、東京大学史料編纂所に所蔵されており、それは達孝蔵本の謄写本で、すでに能楽資料集成11「重修猿楽

伝記・文化七年猿楽分限帳」（わんや書店 昭和56年12月）に翻刻・解題を施されている。今回調査したものは田安家周辺で蒐集された能楽資料であり、伯爵徳川達孝は田安家の末流に当たることを勘案すると、達孝蔵本はおそらくこの資料館寄託本を親本としていふと考えてよいのであろう。いづれにしても他に見えない記録であり、文化七年現在の能役者から諸役、作り物師に至るまでの、各座の陣容、年齢構成、所得までもを網羅しており、先の解題に拠れば、時期的に「天明三年（一七八三）猿楽分限帳」に次ぐものだといふ。今回の調査によつてその親本が判明したということにならうか。ところで、能楽資料集成が「文化七年」とこの分限帳に冠したについては、読み手の便宜を計つてのことであろうが、一考を要するよう思う。それは底本にもその親本と推される本書にもそれが冠されていないのはもちろんのこと、『国書総目録』にも成立が掲出されていらないからで、後続の研究者には検索に少なからぬ不便が生じるのではなからうかと懸念される。とまれ、幕府は武士の礼楽とし

\*\*\*\*\*

て能楽と幸若舞を「武家式楽」と定め、江戸時代には能楽が隆盛を見るわけであるが、その割には本寄託資料中に能楽関係資料は多くない。この上は別に置かれた可能性、子である松平定信の文庫への委譲等を視野にいれるべきかと考へる。

磯水絵氏は二松学舎大学文学部教授。日本古典音楽史および中世説話が御専門で、著書に永年の御研究をまとめられた『説話と音楽伝承』（和泉書院、二〇〇〇年）などがあります。現在当館に寄託中の田安德川家資料について、特に楽書を中心にその資料的価値について御執筆いただきました。

なお、田安德川家資料は現在書誌調査を進めており、来年（二〇〇二年）二月二日（金）に講演会（福島和夫氏・松方冬子氏・鈴木淳）、また、二月二日（火）から三月一日（金）まで特別展示を行う予定です。詳細は決まり次第当館ホームページにてお知らせいたします。

## 新しくなった

## 「国文学論文目録データベース」

武井 協三

二〇〇一年四月から「国文学論文目録データベース」が大きく改善されました。すでに検索は無料になっていましたが、情報の掲載が格段に早くなり、操作も簡単かつ便利になりました。

## 改善された主要三点

変更したのは、おもに次の三点です。

第一点は「国文学論文目録データベース」(以下論文DBと略称)に速報性を持たせたことです。

これは論文DBの事業が始まって以来の長年の懸案でした。論文DBのデータは『国文学年鑑』所載の論文目録から作られてきました。そのため、論文DBに新しいデータが追加されるのは、『国文学年鑑』の刊行からさらに一年遅れました。例えば、一九九七年発表の論文を掲載した『国文学年鑑』は一九九九年三月の刊行、論文DBへの追加掲載は二〇〇〇年三月でした。つまり論文が発表されてから、最長で三十九ヶ月後になら

ないと、その論文が論文DBでひけなかったわけです。

この年月の遅れを、なんとか半年以内にとめようというのが当面の目標です。もちろん今後、この速報度をアップさせていくよう努力していきます。

第二点は論文DBの操作性を向上させたことです。

以前は、当館ホームページにアクセスしてから再度Telnetという通信の手順を経て、ようやく論文DBに入ることになっていました。このため国文学研究資料館に申請して、ユーザーIDやパスワードの交付を受けなければなりません。また検索条件の指定や結果の表示は、「A:」や「DS:」といった記号を知ったうえで、いちいちコマンドで指示しなければなら

りませんでした。こういった煩雑な手続きや複雑な操作を改善したのも、今回の変更です。

第三点は論文DBに『国文学年鑑』の長所を反映させたことです。

例えば、論文の中に新資料の翻刻や複製を出しているものが、よくあります。『国文学年鑑』では

それらの新資料のタイトルを「翻刻複製作品一覧」のページに掲載しています。これは従来の論文DBでも検索できましたが、今回はさらに『国文学年鑑』の配列情報を生かすように工夫しています。

## はじめての論文DB検索

では新しい論文DBは、どうや

国文学論文目録データベース

更新日 2001年02月19日

論文題名 (3)

キーワード (4)

論文執筆者 (5)

表示件数 (7) 表示方法 見開き(新・古) (8)

検索 (9) クリア (10)

ドキュメント完了

図A 簡易検索画面

って利用すればよいのでしょうか。

まず当館のホームページ  
(<http://www.nijiac.jp>)にアクセスしてください。その後、「データベース」↓「国文学論文目録」↓「検索画面」と順番にクリックすると、図Aのような画面にたどりつきます。

研究者の方なら「論文執筆者名」⑤のところに御自分の名前を、学生なら教わっている先生の名前を入れてみてください。そして「検索」⑨のところをクリックすると、たちどころにその人が書いてきた論文名が並びます。

「おかしい、論文の数が少なすぎる」と思われた方は、「>」をクリックしてください。次のページが現れます。

「論文の題名だけでなく、掲載誌名も見たい」と思われた方は、その論文名にカーソルを持っていて、クリックしてください。掲載誌名・発表年月などが出てきます。こうなったら論文の本文も出てきてほしいと思うのが人情ですが、それはまだ先の課題です。御容赦ください。

これだけのことで、十分便利に使えると思います。まだ国文学

研究資料館の論文DBをお使いになつていない方に、ぜひ御利用をおすすめします。無料です。簡単です。

もう少し高級に使いたい

キーワード④に任意の言葉を入れ、「検索」⑨をクリックしてみます。例えば、「万葉」と入力して検索してみよう。すると、同じ表記の文字列をふくむデータが一覧表示され、15、752件あることがわかります。これが一つの簡単な使い方です。

検索結果はまず、論文のタイトルと執筆者だけの「簡略一覧」として表示されますが、掲載誌名などを表示する「詳細一覧」に切り換えることができ、さらに一件ずつデータを表示することもできます。数字や「>」をクリックして、ページを繰ってください。一ページあたりの表示件数は、五〇件まで増やせます。検索する前に選択しておくと便利です。データは年度ごとに新しいものから順に表示されますが、執筆者ごとに名寄せして表示する方法もあります。これも検索前に決めておくとう便利です。

国文学論文目録データベース

更新日 2001年02月19日  
(LAST UPDATED)

① 検索条件

論文題名	②	部分一致	⑥ AND	⑦
キーワード		部分一致	AND	
作品名		部分一致	AND	
作書名		部分一致	AND	
編者・刊行		部分一致	AND	
掲載誌名		部分一致	AND	
全部の項目		部分一致	AND	

論文執筆者  
時代分類  
分野  
論文の発表年(西暦) 年 ~ 年  
表示件数 1 表示方法 掲載順(新-古)

執筆者名検索

検索 クリア

図B 詳細検索画面

一覧からはさらに、絞り込み検索ができます。試みに「人麻呂」と入れて絞り込んでみましょう。先ほどの15、752件が、約十分の1の1、524件になります。

#### 注意事項 一

とめておいていただきたいことがあります。表記一致をとっていますから、「蜻蛉」で「かげろふ」を検索することはできません。「蜻蛉」でも出てくる「かげろふ」の論文データも、あることはありますが、全てではありません。

またいわゆる「外字」、JISコードにない文字は「≡」になっています。「蠶蠶内伝」は「≡≡≡内伝」となって出てきてしまいます。旧字も原則的には使っていません。「澤田」さんの論文は、申し訳ありませんが「沢田」で検索してください。

### もっと使いこみたい

「蜻蛉」も「かげろふ」も検索したい時は方法があります。「詳細検索」①をクリックしてください。すると図Bのような検索画面に切り換わります。

検索項目②は変更できるので、キーワードを二つにして「蜻蛉」「かげろふ」を入力、「部分一致」⑥にして、条件の掛け合わせ方⑦は、どちらか一方をふくむもの「or」に、そして「検索」をクリックすると、「蜻蛉」「かげろふ」のどちらの表記のデータも、集めることができます。

さらに、堀辰雄の「かげろふの日記」室生犀星の「かげろふの日記遺文」についての論文を除外したければ、絞り込み検索のボックスに作家名を一人ずつ入れ、含まないという意味の「not」を選び

ます。この方法で二回検索すると絞り込みが達成、という芸当もあります。

このように工夫次第で、データを広く、あるいは狭く集めることが可能になります。

### 注意事項 二

この章は、とくにお読みいただくことなくとも、論文DBの利用に支障はないと思いますが、論文DBを作成した側としては、一応記しておかなければならない章です。

論文DBのデータは「国文学年鑑」(1988)の論文目録作成方針に基づいて作られています。「国文学年鑑」と論文DBとの関係は、ホームページ上で説明していますので、詳細はその「こちら」を参照してください。データ採取の基準や方法に関して、利用する前に知っておいてほしい事項を記してあります。

ここでは「こちら」の中から、知っておいていただきたいことややや詳しく記しておきます。

一つは、「国文学年鑑」に未掲載の論文、つまり国文学研究資料館に収蔵されていない雑誌・紀要・単行本収録の論文は、データ

として搭載されていない、つまり検索できないということです。

国文学研究資料館は、国文学に関する論文が載っている雑誌・紀要・単行本の大部分を収蔵しています。しかし芸術や歴史・民俗など境界領域の本に、国文学関係として取り扱うべき論文が収録されている場合もあります。こういった本に載った論文などが、論文DBに搭載されていないことは、時

もう一つは、「国文学年鑑」は作成方針が必ずしも毎年同じではないということ。とくに論文DBを開始した一九八九年、「国文学年鑑」と論文DBの作成作業を同時並行で行うようになった一九九八年に、大きな方針の変更がありました。

なかでも、作品名・作者名は論文DBの開始とともに設けられたデータ項目で、そのためにこの項目がまったく空欄になっている年があります。そもそもこれは、例えば「源氏物語」をキーワードとして検索すれば、「葵上論」という題名の論文も検出できるように、キーワードの一部として設けられた項目でした。

また「国文学年鑑」で採用している「分野」も、研究状況に対応して、年とともに微妙に変化しています。最近では、新学習指導要領が導入されることを受けて、一九九八年に国語教育の分野を変更しました。以前の分野で検索したい場合は、キーワードに入力して検索してもらえば可能になります。

そのほか「こちら」には記していませんでしたが、「国文学年鑑」と論文DBの重要な相違として、論文DBは「国文学年鑑」のすべてを反映しているわけではないという点を、補足しておかなければなりません。

論文を掲載している雑誌・紀要・単行本に関する問い合わせ先は、「国文学年鑑」の「収載雑誌紀要一覧」「単行本発行所一覧」を参照していただく必要があります。また「国文学年鑑」には論文DBにはない「単行本目録」や「学会消息」のページがあつて、利用目的によっては、そちらが有用である場合も多いでしょう。

以上に説明してきた使い方、注意事項のほかに詳細を知りたい方

は、論文DBの「はじめてて利用される方」や「ヘルプ」を御覧ください。

## 最後に

昨今、学会のシンポジウムのテーマとして取り上げられるなど、「情報化」が国文学研究の一つの潮流となっていることは御存知のことと思います。この傾向は「国文学年鑑」の「文部省科学研究費等交付一覧」の最近の項を見てもよくわかりますが、「国文学一般」の「文学論・国文学論」の項に、情報処理に関する論文が、多く並ぶようになってきていることから知られます（情報処理の論文が文学論・国文学論かという疑問もあるでしょうが、この場合、文学・国文学全般に関わる事柄を扱った論文という意味での分類です）。

国文学作品本文データベースが話題にのぼっていて、関心の高さがうかがわれます。

国文学の研究情報はどうにあるべきなのか。「国文学論文目録データベース」と「国文学年鑑」との関係はいかにあるべきか。こういった問題は、我々の室が常日頃考えさせられるところです。ただ「国文学論文目録データベース」も「国文学年鑑」も、国文学研究の基幹部分を下支えする、きわめて重要な情報源となっていることは間違いないと思います。

速報性やデータの精度を高めることをはじめとして、「国文学論文目録データベース」「国文学年鑑」は今後も改良を重ね、研究の要請に応えていかねばなりません。国文学の研究情報を共有する場として、「国文学論文目録データベース」「国文学年鑑」を御利用いただき、御批評、御支援を賜りたいと願っています。

研究情報部情報分析室

(bunseki@njl.ac.jp)

入口敦志

江戸英雄

武井協三

## 文庫紹介 35

### 静岡県立中央図書館（葵文庫）

静岡県立中央図書館の特殊コレクション「葵文庫」は、江戸幕府旧蔵書を収蔵の基礎とする。昌平坂学問所・箱館奉行所などに収められていた和漢書、また、番書調所・洋書調所・開成所などに収められていた洋書が、徳川氏の駿府移住にともなって静岡に将来され、新たに開かれた駿府学校（のちに静岡学校）の蔵書となった。のち蔵書は静岡師範学校に引き継がれ、大正十四年、静岡県立図書館葵文庫の開館によってここに移管された。なお、その当時は図書館全体の名称が葵文庫であり、いまの「葵文庫」は静岡文庫と称されていたが、昭和四五年に静岡県立中央図書館が現在地に新築移転したことによって、静岡文庫の名を葵文庫に改めたのである。

ことも、特筆されてよい。また、希覯に属する慶長敕版『論語』は、林復斎および洪江拙斎の旧蔵である。

静岡県立中央図書館はインターネットによる情報提供も充実しており、葵文庫には特にデジタル葵文庫 <http://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/aoi/> を設けている。利用価値はきわめて高く、記述の助けとさせていただいた。ぜひ参照されたい。

開館時間は午前九時から午後五時（水、木、金曜日は午前九時？午後七時）、休館日は毎月末日（土・日曜日の場合）は金曜日、国民の祝日（日曜日の場合は翌日の月曜日）、特別整理期間、年末年始、その他。静岡鉄道美術館前駅より徒歩約十五分もしくは「草薙駅・静岡鉄道美術館前駅から静岡鉄道バス県立美術館下車徒歩一分。〒422-1800 静岡市谷田五三一、電話〇五四―二六二―二四六、FAX〇五四―二六四―四二六八。

蔵書数は、洋書八三三三部二二二七冊、和漢書九九部一二五〇冊。いわゆるハルマ辞書の原本たる蘭仏辞書（Amsterdam, 1779）を収めることはよく知られているが、万延元年の遣米使節によって将来された書物のうち十余部を収める

（文献資料部 齋藤希史）



## 橋本進吉旧蔵仮名遣書コレクション

偉大な国語学者であった橋本進吉（明治15〔昭和20〕）には多様な業績があるが、音韻と表記に関する研究もよく知られている。上代特殊仮名遣についての講演記録『古代国語の音韻に就いて』や、同じ岩波文庫に収められた『駒のいななき』のような小文によってこの領域の面白さに触れた読者も多いであろう。橋本進吉の旧蔵本は戦災に遭うなどして多くが失われ、その一部が東大国語研究室に引き取られているが（同研究室編『国語研究室』6、昭和42・10に目録あり）、この度、子息の研一氏より仮名遣書の貴重なコレクションが国文学研究資料館に譲渡された。内訳は写本五点、版本二点、橋本進吉自身による新写本三点、青焼複写および写真帖三点の計十三点である。点数は決して多くないが、日本語表記史の研究上まさに逸すべからざる資料群と評しうる。

まず藤原定家の定めた「定家仮名遣」の基本資料である『下官集』の貴重な伝本群がある。（1）正

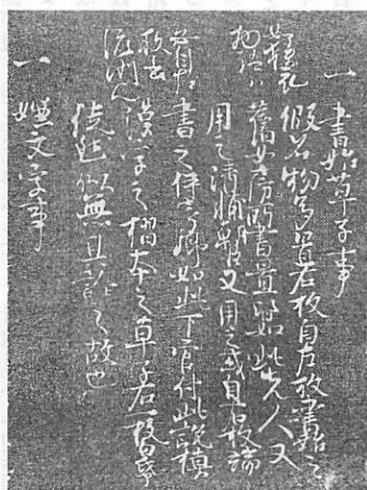
平十二年写の現存最古写本「倭歌作法」（為相奥書本系、「和歌会次第」と合）。（2）定家自筆本の風姿を伝える模刻版本「定家卿書式（三藐院殿臨書）」の版本は現存最善本であり、しかも現在二本しか伝存が知られない。（3）橋本の講義録によつて存在は知られていたが所在がわからず幻の系統であった嘉禎四年奥書本。これは「詠歌聞書」と題する写本の中に含まれている。前半は飛鳥井雅章卿聞書である。以上の三本は、今後『下官集』の研究に志す者の必ず調査すべき資料と言わねばならない。そのほか、「或秘書」と題する一本（『悦目抄』系の歌学書）にも『下官集』の仮名遣用例部分が含まれている。

次に、より実用的な定家仮名遣のマニュアルとして成立した『仮名文字遣』の現存屈指の古写本（明応四年写）がある。本文は版本系と見られるが、これまで紹介されたことのない注目すべき伝本である。なお本コレクションには

無刊記の版本一冊も含まれている。そのほか「定家仮名遣書法」と題する一本は伝宗祇作の別書で、寛佐奥書を有する。

これらの作品はもちろん国語学者によつて検討されてきたのであるが、実は和歌や物語を写写するための規範として作られた学書に他ならない。国語学者もこの領域に積極的に足を踏み入れてみてはどうだろうか。また、国語学の方面では現在表記史の研究が新たな盛り上がりを見せているものの、これらの基礎的な文献の調査は『国語学大系』の頃から存外進んでいない。今後の活発な利用が望まれるところである。

最後に、橋本進吉自身による新写本の中から『仮字遣奥山路』を挙げよう。本書は石塚龍磨の著作



模刻版本『定家卿書式』

で、橋本がこれを見出し、上代特殊仮名遣の研究を大きく進める機縁になったことで著名である。原本は関東大震災で消失したが、それ以前に複数の転写本が東京帝大で作成されていたため湮滅をまぬかれた。東大国語研究室にはやはり橋本の手になる新写本が遺されているが、本コレクション所蔵本は手元に置くための愛蔵本として作られたのではないかと想像される。『古代国語の音韻に就いて』などでの作品のことを知った読者にとっては、新写本とはいえない一本も由緒深く感じられるに違いない。

（お茶の水女子大学助教授  
元国文学研究資料館文献資料部  
助教授・浅田 徹）



## 情報メディア室の現在

野 本 忠 司

私の所属している情報メディア室は本館の建物の二階の奥、正門方向に向いた比較的大きめの窓がある部屋にあります。窓からは、四季折々に変化する庭のようすを眺めることができ、先日、訪れた大学の友人も、「俳句を詠みたくなるようなところだなあ。」と、庭の文学的な雰囲気感動した様子でした。

さて、情報メディア室の仕事ですが、定義から言うと「国文学に関するマルチメディアの統合処理、およびこれに必要な調査研究」ということになっています。国文学とマルチメディアというのは、互いになかなか連想しにくい関係で、例えば、研究情報部データベースの中村先生の絵入り源氏物語などの仕事を目にしてようやく、そうだったのかと手を打つわけあります。

それでは、コンテンツのマルチメディア化ではすでに実績がある研究室が当館に（おそらくいくつも）あるのに、情報メディア室は一体に何をやるのかという疑問が湧いてくるのは当然でしょう。そこで、当研究室が生き残りをかけて取り組んでいるが、定義中の「統合化」ということです。

マルチメディア・データベースは当館にすでにいくつも存在し、また、今後増えていくことが予想されます。ただ、問題は、それらのデータベースがそれぞれ独自の仕様で設計されているため、統合利用できない点にあります。この問題は、いままで当館ではまったく認識されてきませんでした。研究室のタコソボ化も一つの要因でしょう。コンピュータの世界では、現在、オブジェクト指向というパラダイムのもと、プログラムの再生産、再利用を効率化しよう

という動きが非常に活発です。当館のデータベースの場合も、システムの重複する部分は非常に大きいと考えられます。どのデータベースでもデータの格納と利用（アクセス）は必須の機能ですが、当館では単にデータの形態が異なるというだけで、互いに再利用不可能な形になっています。

そこで、情報メディア室は、XMLを利用してデータ（コンテンツ）とシステムを分離しようという研究を行なっています。もし、コンテンツとシステムが完全に分離できれば、データベースのシステムとしての機能は一元化され、不要な重複を取り除くことができます。そうすると、システムをデータベースごとに作る必要がなくなります。基本的に必要になるのは、データのフォーマットの設計と入力だけです。なにしろ、システムが一本化されるので、目録であろうが、本文であろうが、区別することなくシームレスにアクセスできるようにあります。

みなさんに使っていただけるようになるのは、それほど先の話ではないと思います。どうぞご期待ください。

まだ、若干スペースがあるようなので、私の個人的な研究を紹介したいと思います。

私は自然言語処理という分野を専門にしています。自然言語処理というのは、人の言葉をコンピュータに認識させたり、生成させたりすることを目的とする学問です。最近、パソコンショップに行くとよく目にする音声認識ソフトも自然言語処理研究の成果と言えます。私は、この自然言語処理のなかでも、特に自動要約と呼ばれる分野を中心に研究しています。自動要約は、文章の自動簡略化を目指す研究ですが、インターネットに溢れる情報をできるだけ手早く取捨選択できるようにしたいという極めて現実的な問題意識が背景にあります。

ただ、現在のところ一部商品化されていますが、依然研究段階で、日常的に利用されるようになるまでまだ時間がかかると思われます。また、最近では、講演などの音声言語に対する要約というものも検討されるようになってきており、応用範囲は広がっています。

（研究情報部助教授）

## 秋季通常展示のお知らせ

## 近世前期の文学—小説を中心に—

平成13年度は、古典連続講演（次項）にあわせ、当館所蔵の版本資料を通じて、仮名草子・浮世草子を軸に、慶長・寛永から元禄に至る文芸の流れをたどります。

日時 10月1日（月）～11月16日（金）

会場 国文学研究資料館2階展示室

来館自由・入場無料

なお古典連続講演のある日、およびその前日に限り、『好色一代男』初版本をはじめ、当館所蔵の貴重本を数点ずつ展示いたします。

## 古典連続講演会のお知らせ

## 「連続講演 西鶴」（全五回）

平成13年度の古典連続講演会のテーマは「西鶴」、人と時代・作品の解析・受容の問題等、多彩な内容が準備されています。

講師 国文学研究資料館名誉教授 長谷川強氏

日時 9月28日（金）・10月12日（金）・10月26日（金）・11月9日（金）・11月22日（木）

15時～16時半

会場 国文学研究資料館大会議室

定員100名・聴講無料・事前予約制

多数の皆様のご来観・ご来聴をお待ちいたします。

## 第25回国際日本文学研究集会

## テーマ「造形と日本文学」

2001年11月15日（木）16日（金） 国文学研究資料館大会議室

11月15日（木）

〔研究発表 13：10～17：10〕

箱の中の謎—反—推理小説としての安部公房の「箱男」—

大江健三郎の文学におけるタルコフスキーの反響

「万葉集」巻頭の「雄略歌」について

中世日本文学における舍利信仰

13世紀半ばにおける文学作品の絵画化観—源氏絵陳状をめぐる—

草手絵と和歌と—冷泉家時雨亭文庫の「元輔集」をめぐる—

〔レセプション 17：30～19：00〕

11月16日（金）

〔研究発表 10：30～12：15〕

『朝鮮太平記』と『伽婢子』の挿絵の類似性

抱一の俳画とその背景—「吉原月次風俗図」を中心に—

江戸時代後期における文学の消費—根付から岳亭定岡まで—

〔公開講演 13：30～16：00〕

文学教育と映像メディア

「浦島伝説」から「浦島子伝」への発展について—亀、蓬莱山、玉手箱—

Margaret KEY

Sergey CHIRONOV

徐 送 迎

Brian RUPPERT

Estelle BAUER

Claire-Akiko BRISSET

朴 賛 基

井田 太郎

Matthi FORRER

木越 治

嵯 紹 壺

参加方法：氏名・住所・現職・研究分野・レセプション参加希望の有無をお書きの上、はがきまたは封書でお送り下さい。申込書の形式は自由ですが、当館ホームページ掲載のものをお使いになると便利です。参加費は無料です。

レセプション参加費：1,000円程度（当日お支払い下さい）

申込・問合せ先：142-8585 品川区豊町1-16-10 国文学研究資料館研究情報部情報資料室内

国際日本文学研究集会事務局 03-3785-7131 内403、408 fax03-3785-4455

# 文献資料部事業報告

## 新藤 協三

平成十三年年度の国文学文献資料の調査収集事業は、五月十五日の収集計画委員会の議を経て、五月二十四日の国文学文献資料調査員会議（総会）において具体的な打合せを行ない、例年どおり順調に進んでいる。

昨年度は古典分野・明治期資料分野に携わる調査員ともども午後から参会したが、今年度は近代資料の調査員は午前から出席し、古典分野と異なる調査・収集方式の説明を受けた後、全員が合流し、今後の調査・収集のあり方や、調査カードの書式の問題などについて、活発な意見交換がなされた。

なお、館長から、国文学研究資料館創設以来蓄積して来た二十八万点余の調査カードについて、今年度から電子情報化する計画があること、その方針を視野に入れた調査方法も検討すべきこと、この二点の話題提供があり、そのことに関する質疑や要望も出されたが、調査カードの電子情報化の問題は、

文献資料部の今後の業務と大きくかわつて来る見通しである。

当館の調査収集業務は調査員の方々の御協力を得て、年間目標を調査七千点以上、収集五千点以上を目指して行なつて来ているが、現在まで調査点数二十八万二千五百点余、収集点数十六万四千八百点余に及んでいる。

### \*平成十二年度国文学文献資料調査・収集の概況

#### 一、調査

平成十三年度は、本年三月末までに二一九箇所在所蔵資料一一、五九八点を調査した。

北海道・東北地区（順不同・敬称略、一部省略。以下同じ）

北海道教育大学附属図書館（札幌校）・伊達市開拓記念館・弘前市立図書館・願教寺・宮城県図書館・東北大学附属図書館（狩野文庫）・仙台市博物館・山寺芭蕉記念館・山形大学附属図書館・山形短期大学附属図書館・酒田市立光

丘文庫・米沢市立米沢図書館  
関東地区

茨城大学附属図書館・筑波大学附属図書館・輪王寺天海蔵・国立歴史民俗博物館・早稲田大学図書館（教林文庫等）・東京大学文学部国文学研究室・宮内庁書陵部・三井文庫・東洋文庫・東京都立中央図書館・尊経閣文庫・横浜開港資料館

#### 中部地区

新潟大学附属図書館（佐野文庫）・糸魚川市歴史民俗資料館・柏崎市立図書館・鶴飼文庫・山梨県立図書館・上田市立図書館（山崎文庫）・長野県立歴史館・諏訪市博物館・高遠町文化センター・磐田市教育委員会・浜松市立賀茂真淵記念館・三島市郷土館（勝俣文庫）・名古屋市蓬左文庫・大須文庫・名古屋市郷土館・富加町郷土資料館・津市図書館・尾鷲市立中央公民館郷土室

#### 近畿地区

夢望庵文庫・京都府立総合資料館・京都大学文学部（頼原文庫）・蘆庵文庫・陽明文庫・京都国立博物館・瑞光寺・京都市某家・高乗健家・奈良女子大学附属

図書館・天理大学附属天理図書館・郡山城史跡柳沢文庫保存会・大阪天満宮御文庫・大阪女子大学附属図書館・和歌山大学附属図書館（紀州藩文庫）・田辺市立図書館・月照寺・青山歴史村  
中国・四国地区

鳥取県立図書館・島根県立図書館・島根大学附属図書館・太鼓谷稻成神社・岡山大学附属図書館（池田文庫）・ノートルダム清心女子大学附属図書館・津山市郷土博物館・広島市立中央図書館・広島大学附属図書館・専徳寺・山口大学附属図書館（棲息堂文庫）・岩国徴古館・萩市立図書館・岩崎家・香川大学附属図書館（神原文庫）・総本山善通寺・愛媛県立図書館・大洲市立図書館・徳島県立図書館（森文庫）・高知県立図書館（山内文庫）  
九州・沖縄地区  
柳川古文書館・佐賀大学附属図書館・祐徳稲荷神社（中川文庫等）・長崎県立長崎図書館（諫早文庫）・長崎大学附属図書館経済学部分館・肥前松平文庫・松浦史料博物館・長崎県立対馬歴史民俗博物館・熊本市立図書館・臼杵市立臼杵図書館・杵築市立図書館・

佐伯市教育委員会・竹田市立図書館・日南市立図書館・琉球大学附属図書館

## 近代

函館市立図書館・八戸市立図書館・弘前市立図書館・筑波大学附属図書館（宮本文庫）・早稲田大学図書館・慶應義塾福澤研究センター・新潟県立図書館・小浜市立図書館（酒井家文庫）・上田市立図書館（花月文庫）・信州大学附属図書館・静岡県立中央図書館（葵文庫）・名古屋市蓬左文庫（雑賀重良旧蔵書）・大阪府立中之島図書館・和歌山大学附属図書館（紀州藩文庫）・南方熊楠邸保存顕彰会・神戸大学附属図書館（住田文庫）・香川大学附属図書館（神原文庫）・高知市民図書館（近森文庫）・高知県立牧野植物園（牧野文庫）・祐徳稲荷神社（中川文庫等）・熊本大学附属図書館（五高旧蔵書）

## 海外

台湾大学図書館・パリ大学美術史考古学図書館（ジャックドゥセコレクシオン）・パリ国立図書館（デュレコレクシオン）・ブルベラー家・大英図書館・チェスター・ビーティ図書館・サレジオ大学・

キオソーネ美術館・東洋言語文化研究所図書館・上海図書館・ルーアン市民図書館・ロンドン大学S O A S 図書館

海外資料調査は文部省科学研究費補助金、リサーチシップ経費等によるものである。

## 二、収集

本年三月末までに六九箇所所の蔵資料三六九三点を収集した。

## 北海道・東北地区

弘前市立図書館・盛岡市中央公民館・願教寺・酒田市立光丘文庫・

## 関東地区

## 宮内庁書陵部

法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・東京大学文学部宗教学研究室・東洋文庫・東京都立中央図書館（特別買上文庫）・

## 中部地区

新潟大学附属図書館（佐野文庫）・糸魚川市歴史民俗資料館・

黒川村立公民館・諏訪市図書館・愛知県立大学附属図書館・大須文庫・名古屋博物館・新城ふるさと情報館（牧野文庫）

## 近畿地区

夢望庵文庫・京都府立総合資料館・蘆庵文庫・陽明文庫・宝山寺

## 中国・四国地区

鳥取県立図書館・ノートルダム清心女子大学附属図書館・光藤益子・益田家・総本山善通寺・大洲市立図書館・高知県立図書館（山内文庫）

## 九州・沖縄地区

祐徳稲荷神社（中川文庫）・長崎大学附属図書館経済学部分館・肥前松平文庫・臼杵市立図書館・杵築市立図書館

## 近代

八戸市立図書館・弘前市立図書館・上田市立図書館（花月文庫）・尾鷲市立中央公民館・南方熊楠邸保存顕彰会・神戸大学附属図書館（住田文庫）・香川大学附属図書館（神原文庫）・高知市民図書館（近森文庫）・祐徳稲荷神社（中川文庫等）

## 海外

国立故宮博物院・韓国国立中央図書館

## \*平成十三年年度調査・収集計画

本年度は、調査一四六箇所（近代・海外を含む）九三六〇点、収集六六箇所（同）五三五〇点を目標として、調査収集業務を開始したが、海外調査はサレジオ大学、同収集はカリフォルニア大学バ

クレー校の各一箇所のみにとどまる予定。

## \*第五文献資料室

本年度は客員教授として日本大学柏谷宏紀教授が着任した。併任

助教授は、前期が京都大学須田千里助教授、後期が広島大学竹村信

治助教授に委嘱、各専門分野に応じた書誌的研究、調査収集業務に参加していただいている。

## \*国際研究室

本年度は七月一日から九ヶ月間の任期で、北京大学比較文学研究所長嚴紹璽教授が着任、「中日書籍交流史の研究」のテーマで研究活動に従事している。

## \*その他

第一文献資料室の浅田徹助教授が転出した後を承けて、四月から小川剛生助教授が着任した。非常勤研究員として加藤植行氏、リサーチ・アシスタントとして斐文卿氏・佐藤裕子氏・丸山倫佳子氏がそれぞれ新規に採用になった外、事務補佐員の稲垣奈緒氏に替わって、谷淳子氏が四月から採用された。

## 【調査研究報告】

第二十二号は目下編集集中である。（文献資料部長）

# 研究情報部事業報告

松村雄二

## 情報資料室

第二十四回国際日本文学研究集

会を、十一月十六、十七日両日にわたって開催した。参加者は二二名（うち海外より四一名）。本年度は「境界と日本文学―画像と言語表現―」のテーマを設け、研究発表は十一名全員がこのテーマに関するものであった。招待研究発表者はカナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学のジョシユ・モストウ準教授と、アメリカ・カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のハルコ・イワサキ準教授、公開講演は「行燈の中に座っていた狐」など―文学と美術のはざま―の表題で、東京学芸大学の小池正胤名誉教授、「中国資料に描かれた日本人像―遣唐使の風貌を中心に―」の表題で、浙江大学の王勇教授が行った。なお図版を多数収める会議録を三月に刊行した。

催事の情報収集とホームページによる発信を行った。

## 情報分析室

『国文学年鑑』平成十一年版の編集を完了し、平成十三年七月に刊行した。主要項目の収載件数は、次のとおりであった。

◇雑誌・紀要・論文集・新聞所載  
論文件数 一一、六七四

◇学会一覧件数 四三

◇学会研究発表一覧 八三二

◇指定文化財数 九

◇平成十一年度文部省科学研究費  
等交付数 五四八

◇受賞一覧数 八四

◇訃報 四四

◇単行本一覧数 二、五三〇

◇収載雑誌紀要一覧数 一、二二二

◇発行所一覧数 九二六

◇翻刻複製作品一覧数 一、〇五一

◇執筆者索引数 八、六七五

頁数は前年（平成十年版）より

九三頁減の八六八頁。販売価格は

一一、五〇〇円である。

一昨年度まで三月に刊行してきた『国文学年鑑』が、昨年につづき三ヶ月あまり遅れての刊行となった。近年の予算緊縮状況のもと、努力を重ねたが、三ヶ月遅れの刊行が精一杯であった。

『国文学年鑑』は全国の大学図書館、国文学研究室に送付して、研究の基礎情報を提供してきた。まことに遺憾ながら、この送付を中止することを御報告せねばならない。これも予算緊縮が第一の理由である。図書館や研究室では冊子体『国文学年鑑』の利用から、『国文学論文目録データベース』の利用に切り替えることを、利用者にも助言してほしいと希望する。

懸案であった『国文学論文目録データベース』の改良が実現し、この四月より始動した。格段に使いやすいようになったという声が当室には届いている。改良の詳細、利用の仕方については、本館報に「新しくなった国文学論文目録データベース」として、記事を掲載している。ぜひ御一読の上、多くの方に利用していただきたい。

本年二月・三月には新システムへの移行のため、『国文学論文目録データベース』が開店休業の状態となる時期があった。御迷惑をおかけしたことをおわびしたい。

『国文学論文目録データベース』が充実していくと、『国文学年鑑』の存在がおよびやかされるという、当室にとっては「痛し痒し」の問題がある。ただ『国文学年鑑』には『国文学論文目録データベース』ではカバーできない部分も多い、というのが現在の当室の認識である。冊子体『国文学年鑑』の編集刊行は今後も続けていく予定なので、御支援をお願いしたい。

データベース室  
平成十三年二月に、『吾妻鏡』のCD・ROMを出版した。並行して進めているデータベース構築のうち、平成十二年度は『栄花物語』および四鏡の歴史物語データベースが総仕上げの年であった。鈴鹿本の『古事記』と島根大学図書館蔵の『出雲国風土記抄』（四冊本と二冊本の二種）の本文テキストは、館外の四名の研究者（監修員）のお世話になって進められる監修の年に当たった。

初期入力事業としては、『夫木和歌抄』の本文テキストを入力した。

## 【吾妻鏡】は行間の仮名情報

大量であり、かつ、データベースの情報としては不十分で、作業は難航を極めたが、無事刊行することができた。その余波を受けたこともあり、歴史物語の総監修作業が遅れている。「古事記」「出雲国風土記抄」の監修は順調に終えていただき、平成十三年度中の公開に向け、着実な進展を見ることができた。館内スタッフの努力も相応なものがあるが、館外の研究者の協力に負うところ極めて大きい。

平成三年度より構築を開始した

古典人名データベースは、着実なデータの蓄積を見ている。平成十一年度からは、肖像画データをも階層構造に加えるなど仕様を拡張し、年次情報の西暦データ付加などにより、年表情報への出力を可能にするなど、データベースの応用レベルを拡張して、発展的に継続している。このうち、肖像画を中心とした部分は、すでに国文学研究資料館のホームページを通して公開している。

データベース利用案内は、目録データベース三本の無料化に伴い、実質的に大きく利用資格が拡張されたこともあって、使い始めるた

めの説明を求めてくるなど、初歩的な質問が目立った。今も、毎週十本足らずの質問メールがその内容で届いている。

平成十二年十二月のシンポジウムコンピュータ国文学(第六回)は、試験公開中の古典大系データベースの利用報告を軸にプログラムを組んだ。「二十一世紀の文学研究とコンピュータ」日本古典文学本文データベースの評価を通して」と題して、上代・中古・中世・近世の専門家を招き、講演とパネル討論を行った。

## 情報処理室

情報システムに関わる通常の運用・運転を除く平成十二年度の事業は、以下のように実施した。

(1) 第六期情報システムの導入

基本サーバ(Enterprise1000)を中心としたサーバ系、約150台に及ぶパソコン、プリンタ等のクライアント系、ギガビットイーサネットによる高速LAN系の三つのカテゴリに基づき第六期情報システムの導入を行った。特に、館内LANをATM(155Mbps)からギガビットイーサネット(1000BASE)に切り替え、ネットワーク性能の向上をはかった。

(2) 業務システムの運用

マイクロ資料目録、和古書目録、論文目録、古典籍総合目録、日本古典文学大系本文の各データベースの運用機能の拡充をはかった分散環境への移行を進めた。また、OPAC等の運用を行った。

(3) システム運用管理体制

汎用機による運用が終わり、複数サーバによる分散環境に移行したことに伴い、システムの運用管理体制の見直しを行い、新たなシステム運用環境を構築し、実施している。

(4) セキュリティの強化

ファイアウォールの機能を向上させるなど、セキュリティ対策の強化を実施した。

(5) 日本古典文学本文データベースの試験公開

汎用機からサーバ環境への移行に伴い、より快適な操作性をもった正式版を開発し、十三年四月より第二次試験公開に入っている。

(6) 館外との協力

メディア教育開発センター(幕張)で開催された人文系共同利用機関情報システム連絡会において、システム運用管理等について各共同利用機関と情報交換を行った。

## 研究開発室

客員として跡見学園女子大学文学部から神野藤昭夫教授(中古・中世物語文学研究)を、九州大学大学院人文科学研究科から辛島正雄助教授(同じく中古・中世物語文学研究)を迎え、それぞれの研究に従事していただいた。十二年度以降における開発室の研究開発経費の停止によって、従来のように国文学データベースの開発に関する新しい研究計画を推進するまでに至らず、専門的立場からの種々の助言を受けるに留まった。

なお、開発室内部においては、お二人の来館が重なった際に、専門である物語文学の研究を館員の参加のもと都合五回ほど実施した。情報メディア室

十二年度は主として以下のような業務をおこなった。

(1) 当館ホームページサーバの運用とコンテンツ開発環境の維持管理

当館ホームページは各ホームページ委員が必要に応じて自身のパソコンから自由にコンテンツを修正できるように分散編集体制をとっているが、このような体制を実現および維持するためのソフトウェア

アの実装、運用、管理をおこなった。

## (2) インターネットライブ中継の実施

当館主催のシンポジウム、講演会の内容を広く館外に発信するための試みとして、シンポジウムコンピュータ国文学と、公開講演会「ジェンターの生成」の二集会について、インターネットを介したライブ中継をおこなった。

いずれの中継でも、十分視聴に耐え得るクオリティを達成することができた。

## (3) XMLを軸とした「真に」汎用なデータベースエンジン の研究・調査

当館には書誌目録、本文データ、画像を含むマルチメディアデータ等、様々なデータベースが、他との連携を考慮せず独自の設計方針に基づいて開発されてきている。このような状況を鑑み、それぞれのデータベースの異種性・特殊性に対応可能な、汎用で統一的なデータベースエンジンの研究調査を開始した。十三年度はプロトタイプングをおこなう予定である。

(研究情報部長)

# 整理閲覧部事業報告

鈴木 淳

整理閲覧部では、資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等の業務を行っているが、今年度新たに古典連続講演を始めた。平成十二年度の当部の業務は次のとおりであった。

## ①資料の受入

資料受入数についてみると、マイクロ資料は、ロールフィルム八四リール、マイクロフィッシュ三六枚、図書は、三、一三〇冊、逐次刊行物は、四、一〇七冊であった。その結果、平成十二年度末の全所蔵数は、別表のとおりとなった。

## ②バーコード貼付

以前から懸案であった所蔵資料二万冊のバーコード貼付作業を十一月から実施した。三月末現在の資料別貼付状況は活字本・影印本約六七％、逐次刊行物六三％、和古書約七〇％、マイクロフィルム、紙焼写真本はほぼ終了した。

今後受け入れる資料については、その都度貼付する。

## ③マイクロ資料の整理

累積マイクロ資料目録データ約一六六、〇〇〇件のうち、約六、〇〇〇件の点検を行った。

## ④図書資料の整理

活字本・影印本は、一、三七八冊、明治期資料は一、四七〇冊の整理を行った。

また、逐次刊行物は、一、八八〇タイトルの受入、整理を行った。

## ⑤遡及入力

遡及入力作業は、六、二四八冊を入力した。その結果、活字本・影印本は、所蔵数の約六八％が当館のOPAC及び国立情報学研究所(旧学術情報センター)目録システムから検索可能となった。

## ⑥図書館システムリプレイス

情報システムの更新と共に、図書館システムもリプレイスした。今までの独自仕様は廃止し、利用者管理・貸出機能等は既製の図書館システムを利用し、入退館管理

はプログラムを新規に自前で作成した。また、OPACの機能や使い方に多少の変更も生じた。

## ⑦閲覧業務

年間開室日数は、二二四日、来館利用者数は、六、七六二人(一日当たり三〇・二人)、登録者数は、一、三四四人(一日当たり六人)であった。開架資料の閲覧点数は、一九、六七二点(一日当たり八七・八点)であった。

また、文献複写は、二二、八二〇件(一日当たり一〇一・九件)で、電子複写(リーダプリンターを含む)二一八、七九九枚、紙焼写真一七、〇九〇枚、ポジフィルム一、七三七コマを作製した。

## ⑧相互利用

今年度より国立情報学研究所のILLシステムに加入したため、図書・逐次刊行物の複写及び貸借の受付件数が二倍以上に増えた。大学図書館等からの複写・相互貸借の受付は、複写三、六七七件、貸借九一件二四冊であった。他機関への依頼は、複写三一二件、貸借は無かった。

## ⑨資料の保存

当館所蔵原本(写本・版本)のマイクロ化事業は、一八一点、約



二三、〇〇〇コマの撮影を実施した。保存用ネガフィルムの外部保管委託は、平成十年度収集分一、〇一リールを追加委託し、総計三〇、〇四五リールとなった。また、映は、和古書八二巻、明治本一五〇巻を作成した。

なお、例年どおり、四月末から五月初めにかけて資料のくん蒸、年度末には蔵書点検を実施した。

#### ⑩ 古典籍総合目録作成事業

古典籍の総合所在目録データベースを構築し公開することをめざし作業を継続している。

今年度は、書誌データ約一八万件について、公開のためのデータ点検を二年計画で開始した。また、典拠ファイル（個々の本に関する書誌データを取りまとめ、書名等を統一するための著作、著者に関する情報ファイル）約五〇万件の改訂作業に取りかかった。

システム面では、大型計算機を利用する業務システムから新システムに運用を切り替え、開発と並行し業務移行を進めた。

#### 参考室

#### ① 参考業務

参考質問の受付・回答は四七三件であった。

#### ② 公開講演会

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会を開催した。

・第五十五回「元政―弱者の奇蹟―」（六月二十三日、当館）

「元政の詩歌」揖斐高氏（成蹊大学文学部教授）

「なぜ平塚に元政上人の資料が？」萩原正氏（平塚市隆盛寺住職）

「隠逸伝の盛行―十七世紀の文学思潮―」井上敏幸氏（佐賀大学文化教育学部教授）

・第五十六回「明治文学の創生と展開」（十一月二十一日、当館）  
「政治」と女 菅聡子氏（お茶の水女子大学文教育学部助教）

「立志のゆくえ」十川信介氏（学習院大学文学部教授）

#### ③ 古典連続講演

「岩佐美代子の語る『源氏物語』」  
鶴見大学名誉教授岩佐美代子氏  
による五回の講演（五月十九日、九月二十九日、十一月二十四日、一月二十六日、三月十六日、当館）

#### ④ 展示

○特別展示「元政―弱者の奇蹟―」（六月十九日～六月三十日）

○通常展示

・第七十五回「源氏物語」とその前後（九月二十六日～十月十三日）

・第七十六回「和書のさまさま」（三月十二日～三月二十三日）

#### ○臨時展示

「明治期の文学と出版」（十一月十三日～十二月一日）

#### ⑤ 講演集、展示図録の刊行

公開講演会の講演録である「古典講演シリーズ」は、第六巻「軍記物語とその劇化」（臨川書店）と第七巻「芭蕉と元政」（同）の二冊を刊行し、また、特別展示の図録として「元政―弱者の奇蹟―」（ニチレン出版）を刊行した。

（整理閲覧部長）

## 第7回 シンポジウム

## コンピュータ国文学

12月7日（金）開催

詳しくは当館ホームページ

<http://www.nijl.ac.jp/>

にてお知らせします。

#### 別表

#### 所蔵資料統計

（平成13年3月末現在）

資料種別	点数	冊（リール）数
マイクロ資料		
マイクロフィルム※	154,322点	33,842リール
マイクロフィッシュ	16,122点	55,804枚
紙焼写真本	—	65,255冊
図書（古書及び新刊書）	44,233点	115,994冊
逐次刊行物	4,763誌	143,188冊
寄託資料	958点	4,307冊

※他に複写用ネガ31,561リール、閲覧用ポジ32,832リールがある。

## 評議員等名簿

## 評議員

任期 平成12年7月1日～平成14年6月30日

朝尾直弘 京都橘女子大学文学部教授、京都大学名誉教授

阿部謹也 共立女子大学、共立女子短期大学、横滨大学名誉教授

石毛直道 国立民族学博物館長

大口勇次郎 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授

甲斐睦朗 独立行政法人国立国語研究所長

久保木哲夫 都留文科大学長

久保田淳 白百合女子大学文学部教授、東京大学名誉教授

興膳宏 独立行政法人国立博物館理事、京都大学名誉教授

雑賀美枝 ノートルダム清心女子短期大学長

坂元弘直 独立行政法人国立博物館理事、東京国立博物館長

佐々木毅 東京大学総長（平成13年5月1日～）

佐原眞 国立歴史民俗博物館長

末松安晴 国立情報学研究所長（平成13年5月1日～）

田中彰 北海道大学名誉教授

堤精二 お茶の水女子大学名誉教授

徳江元正 國學院大学文学部教授

中野三敏 福岡大学文学部教授、九州大学名誉教授

平岡敏夫 日本書協委員、筑波大学名誉教授、群馬県立女子大学名誉教授

山折哲雄 国際日本文化研究センター所長（平成13年7月1日～）

吉原健一郎 成城大学文学部教授

## 運営協議員

任期 平成12年8月1日～平成14年7月31日

伊井春樹 大阪大学大学院文学研究科教授

岡崎久司 財団法人大東記念文庫学芸部長

後藤祥子 日本女子大学長

高楚利彦 学習院大学文学部教授

外村南都子 白百合女子大学文学部教授

名和修 財団法人陽明文庫長

延廣眞治 帝京大学文学部教授

野山嘉正 放送大学教授

藤井譲治 京都大学大学院文学研究科教授

宮地正人 東京大学史料編纂所教授

## 共同研究委員会委員

任期 平成13年4月1日～平成15年3月31日

妹尾好信 広島大学大学院文学研究科助教授

竹本幹夫 早稲田大学文学部教授

富士昭雄 駒澤大学名誉教授

牧野和夫 実践女子大学文学部教授

三木紀人 城西国際大学文学部教授

三田村雅子 フェリス学院大学文学部教授

## 国文学文献資料収集計画委員会委員

任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日

大橋正叔 天理大学文学部教授

岸雅裕 愛知文教大学国際文化学部教授

田中登 関西大学文学部教授

身崎壽 北海道大学大学院文学研究科教授

若木太一 長崎大学環境科学部教授

任期 平成13年4月1日～平成15年3月31日

市古夏生 お茶の水女子大学文芸学部教授

加藤定彦 立教大学文学部教授

小島孝之 東京大学大学院人文社会科学系研究科教授

後藤昭雄 大阪大学大学院文学研究科教授

舩城俊太郎 新潟大学文学部教授

## 国際日本文学研究会委員会委員

任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日

今関敏子 川村学園女子大学人間文化学部教授

木越治 金沢大学文学部教授

小池正胤 東京学芸大学名誉教授

湯沼誠二 北海道教育大学教育学部岩見沢校教授

中島国彦 早稲田大学文学部教授

山口博 聖徳大学文学部教授

## 原本テキストデータベース委員会委員

任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日

池上洵一 神戸大学名誉教授

加納重文 京都女子大学文学部教授

久保田啓一 広島大学大学院文学研究科教授

小池一行 宮内庁書陵部調査官

野村精一 実践女子大学名誉教授

森正人 熊本大学文学部教授

吉村誠 山口大学教育学部教授

## 情報システム委員会委員

任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日

安達文夫 国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授

伊井春樹 大阪大学大学院文学研究科教授

石塚英弘 図書館情報大学図書館情報学部教授

内田保廣 共立女子大学文学部教授

杉田繁治 国立民族学博物館民族学研究部教授

長崎健 中央大学文学部教授

永村眞 日本女子大学文学部教授

中山雅哉 東京大学情報基盤センター助教授

根岸正光 国立情報学研究所学術情報研究系教授

星野聰 京都大学名誉教授

和中幹雄 国立国会図書館総務情報システム課長

## 古典籍総合目録委員会委員

任期 平成13年4月1日～平成15年3月31日

- 相島 宏 国立国会図書館図書古典部員  
市古 夏生 お茶の水女子大学文学部助教授  
今西 裕一郎 九州大学文学部教授  
柴田 光彦 元跡見学園女子大学文学部教授  
田村 潤二 東京大学附属図書館事務部長  
原 道生 明治大学文学部教授  
宮沢 彰 国立情報学研究所実証研究センター長  
国文学文献資料調査員  
任期 平成13年4月1日～平成14年3月31日
- (北海道・東北地区)  
小林 真二 北海道教育大学教育学部助教授  
田中 初恵 宮城学院女子大学文学部非常勤講師  
寺島 恒世 山形大学教育学部教授  
永田 信也 北海道教育大学教育学部旭川校助教授  
播磨 光寿 国学院短期大学教授  
宮澤 照恵 北星学園大学経済学部助教授
- (関東地区)  
青柳 隆志 東京成徳短期大学助教授  
石神 秀美 鶴見大学文学部非常勤講師  
石澤 一志 鶴見大学文学部非常勤講師  
石塚 修 筑波大学文学部・言語学系講師  
池澤 一郎 明治大学法学部助教授  
池山 晃 大東文化大学文学部助教授  
岩見 照代 麗澤大学外国語学部教授  
大内 瑞恵 都留文科大学文学部非常勤講師  
大倉 浩 筑波大学文学部・言語学系助教授  
木戸 雄一 佛教大学非常勤講師  
島田 康行 筑波大学文学部・言語学系・アドミニレーションセンター講師  
杉本 和寛 東京芸術大学音楽学部助教授  
丹陽 子 東京学芸大学教育学部助教授
- 土屋 順子 大妻女子大学文学部非常勤講師  
藤 實久美子 学習院大学史料館助手  
藤田 洋治 東京成徳短期大学教授  
山本 陽史 明海大学外国語学部助教授  
山本 和加子 元実践女子大学文学部非常勤講師  
湯浅 佳子 東京学芸大学教育学部講師  
ロバート・キャンベル 東京大学大学院総合文化研究科助教授  
綿拔 豊昭 図書館情報大学図書館情報学部教授
- (中部地区)  
阿部 泰郎 名古屋大学大学院文学研究科教授  
川村 裕子 新潟産業大学文学部教授  
神作 研一 金城学院大学文学部助教授  
甘露 純規 名城大学法学部非常勤講師  
木越 治 金沢大学文学部教授  
佐藤 至子 相山女子大学人間関係学部講師  
塩村 耕 名古屋大学大学院文学研究科助教授  
杉田 昌彦 静岡大学教育学部助教授  
鈴木 孝庸 新潟大学文学部教授  
服部 直子 金城学院大学非常勤講師  
廣部 俊也 新潟大学文学部助教授  
山本 一 金沢大学教育学部教授  
柳沢 昌紀 中京大学文学部助教授  
和田 道子 中京大学教養部教授
- (近畿地区)  
大島 薫 関西大学文学部助教授  
大谷 俊太 奈良女子大学文学部助教授  
岡本 聡 芦屋女子短期大学助教授  
小倉 嘉夫 池坊短期大学講師  
小林 一彦 京都産業大学文学部助教授  
小林 強 大阪国際女子短期大学非常勤講師
- 神道 宗紀 帝塚山学院大学人間文化学部助教授  
曾根 誠一 花園大学文学部教授  
近本 謙介 天理大学文学部助教授  
千本 英史 奈良女子大学大学院人間文化研究科助教授  
中前 正志 京都女子大学短期大学部助教授  
永瀧 朋枝 京都学園大学経済学部助教授  
西田 正宏 大阪女子大学人文社会科学部講師  
原 雅子 金閣短期大学助教授  
森田 雅也 関西学院大学文学部教授  
山本 和明 相愛女子短期大学助教授  
山本 登朗 光華女子大学文学部教授
- (中国・四国地区)  
會田 実 四国大学文学部教授  
石川 一 広島女子大学国際文化学部教授  
稲田 秀雄 山口県立大学国際文化学部助教授  
大伏 春美 徳島文理大学文学部教授  
川崎 剛志 就実女子大学文学部教授  
樹下 文隆 広島女子大学国際文化学部助教授  
島田 大助 広島文教女子大学非常勤講師  
下田 祐輔 徳島文理大学文学部助教授  
下房 俊一 鳥根大学法学部教授  
杉本 好伸 安田女子大学文学部教授  
妹尾 好信 広島大学大学院文学研究科助教授  
竹村 信治 広島大学大学院教育学研究科助教授  
田中 則雄 鳥根大学文学部助教授  
広嶋 進 ノートルダム清心女子大学文学部助教授  
藤沢 毅 広島文教女子大学人間科学部助教授  
松原 一義 鳴門教育大学学校教育学部教授  
森下 要治 広島文教女子大学文学部助教授  
余田 充 四国大学文学部教授

## 〔九州地区〕

- 池田 幸恵 長崎大学環境科学部助教  
後小路 薫 別府大学文学部教授  
大久保 順子 福岡女子大学文学部助教  
樫澤 葉子 九州女子大学文学部助教  
黒木 香 活水女子大学文学部助教  
下野 孝文 県立長崎シーボルト大学国際情報学部助教  
鈴木 広光 九州大学大学院人文科学研究科助教  
高橋 昌彦 純真女子短期大学助教  
田坂 憲二 福岡女子大学文学部教授  
徳岡 涼 国立療養所再春荘病院附属看護学校非常勤講師  
米谷 隆史 熊本県立大学文学部講師  
中原 豊 長崎大学教育学部助教  
長野 秀樹 長崎純心大学文学部助教  
横手 一彦 長崎総合科学大学共通教育センター助教  
国文学研究情報研究専門員  
任期 平成13年4月1日～平成14年3月31日  
浅田 徹 お茶の水女子大学文学部教育学部助教  
飯田 和明 筑波大学附属中学校教諭  
池田 三枝子 実践女子大学文学部講師  
熊本 英人 駒澤大学仏教学部講師  
鈴木 豊 文京女子大学外国語学部教授  
堤 玄太 帝京大学文学部講師  
寺井 正憲 千葉大学教育学部助教  
森野 崇 二松学舎大学文学部助教  
山下 哲郎 明治大学政治経済学部非常勤講師  
湯浅 佳子 東京学芸大学教育学部講師  
青柳 隆志 東京成徳短期大学助教  
浅野 秀剛 千葉市美術館学芸係長  
小林 徹行 和洋女子大学文学部非常勤講師

- 近藤 みゆき 実践女子大学文学部助教  
近藤 泰弘 青山学院大学文学部教授  
佐々木 孝浩 慶應義塾大学附属研究所道文庫講師  
中村 文 埼玉学院大学人間学部助教  
二階堂 善弘 茨城大学文学部助教  
宮崎 康充 宮内庁書陵部首席研究官  
湯浅 吉美 埼玉学院大学人間学部助教  
横井 孝 実践女子大学文学部教授  
原本テキストデータベース監修員  
任期 平成13年4月1日～平成14年3月31日  
池尾 和也 京都女子大学短期大学部非常勤講師  
石澤 一志 和見大学文学部非常勤講師  
海野 圭介 日本学術振興会特別研究員  
茅原 雅之 日本大学文学部非常勤講師  
小林 大輔 早稲田大学本庄高等学院非常勤講師  
小林 強 大阪国際女子短期大学非常勤講師  
佐藤 明浩 都留文科大学文学部助教  
佐藤 智広 昭和学院短期大学助教  
日比野 浩信 愛知大学短期大学部非常勤講師  
安井 重雄 龍谷大学文学部非常勤講師  
山村 孝一 同志社大学文学部非常勤講師  
渡辺 裕美子 早稲田大学第一文学部非常勤講師  
共同研究員  
任期 平成13年4月1日～平成14年3月31日  
課題名〔増補本「和歌一字抄」の諸本整理とそのデータベース化〕  
井上 宗雄 立教大学名誉教授  
藏中 さやか 神戸学院大学文学部助教  
妹尾 好信 広島大学大学院文学研究科助教  
古瀬 雅義 安田女子大学文学部助教

- 日比野 浩信 愛知大学短期大学部非常勤講師  
課題名〔汎諸本論構築のための基礎的研究〕  
加藤 静子 都留文化大学文学部教授  
川平 ひとし 跡見学園女子大学文学部教授  
櫻井 陽子 熊本大学教育学部助教  
松尾 華江 宇都宮大学教育学部教授  
美濃部 重克 南山大学文学部教授  
森 正人 熊本大学文学部教授  
課題名〔河竹黙阿弥台帳の基礎的研究〕  
原 道生 明治大学文学部教授  
飯島 満 聖徳大学文学部非常勤講師  
今岡 謙太郎 早稲田大学文学部非常勤講師  
岩井 眞實 福岡女子大学文学部助教  
寺田 詩麻 早稲田大学演劇博物館助手  
安富 順 早稲田大学大学院文学研究科博士課程  
吉田 弥生 国立劇場調査養成部調査資料課資料係  
課題名〔大名屋敷の饗宴の研究―「弘前藩庁日記」を読む―〕  
青木 直己 株式会社虎屋虎屋文庫課長  
加賀 佳子 元・川村学園女子大学非常勤講師  
阪口 弘之 大阪市立大学大学院文学研究科教授  
鈴木 公子 近畿大学文学部助教  
渡辺 憲司 立教大学文学部教授



## 彙報

・委員会日誌・

平成13年

1月23日	独法化問題検討委員会
2月21日	情報システム委員会
2月22日	図書選定小委員会
3月22日	ホームページ委員会
3月27日	大学院教育協力委員会
3月27日	独法化問題検討委員会
3月29日	情報公開委員会
4月19日	自己点検・評価委員会
4月19日	大学院教育協力委員会
5月8日	館報紀要委員会
5月15日	国文学文献資料収集計画委員会
5月24日	国文学文献資料調査員会議（総会）
5月25日	原本テキストデータベース委員会
5月29日	共同研究委員会
6月19日	自己点検・評価委員会
6月21日	独法化問題検討委員会

6月26日	図書資料委員会
7月10日	館報紀要委員会
7月24日	図書資料委員会
7月31日	国際日本文学研究集会委員会
8月3日	原本テキストデータベース監修員会議
・運営協議員会の開催について・	
平成十三年度第一回運営協議員会が平成十三年六月二十六日（火）に開催され、副会長の交替、管理運営の概況、平成十二年度事業・研究報告、平成十四年度概算要等について協議が行われた。	
・評議員会の開催について・	
平成十三年度第一回評議員会が平成十三年七月十三日（金）に開催され、管理運営の概況、平成十二年度事業・研究報告、平成十四年度概算要求等について協議が行われた。	
・外国出張・	
堀川 貴司	渡航先 フランス
目的	在外日本古典籍資料（フランス）の調査
期間	平成13年2月12日～平成13年2月16日

伊藤 鉄也	渡航先 イギリス	目的	国文学デジタル資料館構築の研究調査	期間	平成13年2月15日～平成13年2月26日
岡 雅彦	渡航先 イギリス・アイルランド	目的	在欧日本古典籍の調査と研究	期間	平成13年2月21日～平成13年3月5日
鈴木 淳	渡航先 イギリス・アイルランド	目的	在欧日本古典籍の調査	期間	平成13年2月25日～平成13年3月11日
田淵 美子	渡航先 フランス	目的	在外日本古典籍資料の調査	期間	平成13年2月24日～平成13年3月3日
松野 陽一	渡航先 アイルランド・フランス	目的	在欧日本古典籍の所在及び伝来に関する調査と研究	期間	平成13年2月25日～平成13年3月5日
久保木 秀夫	渡航先 イギリス・アイルランド	目的	連合王国・アイルランド国内の日本文学資料調査	期間	平成13年2月18日～平成13年2月24日
落合 博志・中野 真麻理	渡航先 イギリス・アイルランド	目的	在欧日本古典籍の所在及び伝来に関する調査と研究	期間	平成13年2月18日～平成13年2月24日
相田 満	渡航先 台湾	目的	国際デジタル資料館システムの国際共同構築と利用に関する研究	期間	平成13年2月18日～平成13年2月25日
安藤 正人	渡航先 中国	目的	第二次世界大戦期アジアにおける文書記録史料の略奪・廃棄・流出等に関する調査	期間	平成13年2月18日～平成13年2月25日

齋藤 希史

渡航先 フランス

目的 在外日本古典籍資料

目 的 (パリ)の調査

期 間 平成13年2月25日

期 間 平成13年3月18日

安永 尚志

渡航先 イギリス・イタリア

目 的 フランス

目 的 国文学電子化テキスト

トの流通のための研

究他

期 間 平成12年3月11日

期 間 平成12年3月23日

谷川 恵一・山下 則子

和田 恭幸

渡航先 イタリア・ドイツ

目 的 欧州における日本古

典籍の調査打合せ

期 間 平成13年3月9日

期 間 平成13年3月24日

安藤 正人

渡航先 マレーシア

目 的 第二次世界大戦期ア

ジアにおける文書記

録史料の略奪・廃棄

・流出等に関する調

査

期 間 平成13年3月4日

期 間 平成13年3月12日

中野真麻理

渡航先 フランス

目的 在外日本古典籍資料

目 的 (パリ)の調査

期 間 平成13年3月11日

期 間 平成13年3月18日

原 正一郎

渡航先 アメリカ合衆国

目 的 国文学デジタル資料

館システムの国際共

同構築と利用に関す

る研究のフォローア

ップ

期 間 平成13年3月15日

期 間 平成13年3月29日

松野 陽一・入口 敦志

渡航先 韓国

目 的 韓国所在の日本古典

籍に関する調査研究

期 間 平成13年3月18日

期 間 平成13年3月21日

入口 敦志

渡航先 台湾

目 的 台湾大学図書館に所

蔵される日本古典籍

の調査と研究

期 間 平成13年5月1日

期 間 平成13年6月29日

原 正一郎

渡航先 オーストラリア

目的 国文学データを統合

利用するためのモデ

ル論的研究

期 間 平成13年6月8日

期 間 平成13年6月17日

伊藤 鉄也

渡航先 イギリス

目 的 外国語による日本文

学研究文献のデータ

ベース化による予備

調査及び研究打合せ

期 間 平成13年6月11日

期 間 平成13年6月18日

武井 協三

渡航先 イギリス

目 的 アンドリュー・ガー

ストル教授と近松時

代物作品の英訳につ

いての共同作業

期 間 平成13年7月10日

期 間 平成13年8月20日

松野 陽一

渡航先 韓国

目 的 韓国国立中央図書館

蔵旧総督府本の調査

・収集

期 間 平成13年7月15日

期 間 平成13年7月18日

大高 洋司・田淵句美子

渡航先 韓国

目的 韓国国立中央図書館

蔵旧総督府本の調査

・収集

期 間 平成13年7月15日

期 間 平成13年7月19日

小川 剛生・堀川 貴司

久保木秀夫

渡航先 韓国

目 的 韓国国立中央図書館

蔵旧総督府本の調査

・収集

期 間 平成13年7月15日

期 間 平成13年7月20日

鈴木 淳

渡航先 アメリカ合衆国

目 的 庄内藩主酒井家の中

心とした諸大名の和

歌・俳諧及び文事に

関する調査研究

期 間 平成13年7月19日

期 間 平成13年7月28日

・海外研修旅行・

原 正一郎

渡航先 アメリカ合衆国

目 的 電子図書館の共有化

についての研究

期 間 平成13年5月27日

期 間 平成13年6月1日

## 人事異動（平成13年3月～平成13年8月）

## 【教育系職員】

発令年月日	氏 名	異動内容（新官職）	旧（現）官職
13. 4. 1	松野 陽一	〔再 任〕 国文学研究資料館長（15.3.31まで） 〔転 出〕	
13. 4. 1	上野 洋三	九州大学大学院人文科学研究院教授	整理閲覧部教授
〃	浅田 徹	お茶の水女子大学文教育学部助教授 〔転 入〕	文献資料部助教授
13. 4. 1	小川 剛生	文献資料部助教授 〔昇 任〕	熊本大学文学部助教授
13. 4. 1	中村 康夫	研究情報部教授 〔配置換〕	研究情報部助教授
13. 4. 1	北村 啓子	整理閲覧部助手 〔採 用〕	研究情報部助手
13. 4. 1	大高 洋司	整理閲覧部教授	甲南女子大学文学部教授
〃	柏谷 宏紀	文献資料部客員教授（14.3.31まで）	（日本大学文理学部教授）
〃	牧野 和夫	研究情報部客員教授（14.3.31まで）	（実践女子大学文学部教授）
〃	原島 陽一	史料館客員教授（14.3.31まで）	（文化女子大学文学部教授）
〃	加藤 慎行	文献資料部非常勤研究員（14.3.31まで）	
〃	安道百合子	研究情報部非常勤研究員（14.3.31まで）	
〃	副田 恵	整理閲覧部非常勤研究員（14.3.31まで）	
〃	加藤 聖文	史料館非常勤研究員（14.3.31まで） 〔併任等〕	
13. 4. 1	須田 千里	文献資料部助教授（13.9.30まで）	（京都大学総合人間学部助教授）
〃	中島和歌子	研究情報部助教授（14.3.31まで）	（北海道教育大学教育学部札幌校助教授）
〃	田島 達也	史料館助教授（14.3.31まで） 〔外国人研究員〕	（北海道大学大学院文学研究科助教授）
13. 4. 1	朴 慶洙	史料館客員教授（14.2.28まで）	（江陵大学校人文学部日本学科助教授）
13. 7. 1	嚴 紹璽	文献資料部客員教授（14.3.31まで）	（北京大学教授）

## 【事務系職員】

発令年月日	氏 名	異動内容（新官職）	旧（現）官職
13. 3. 31	武川 栄一	〔定年退職〕	管理部長
13. 4. 1	松浦 晃幸	〔転 出〕 文部科学省初等中等教育局財務課教職員配置計画専門官	管理会計課課長
〃	添田 勉	長岡工業高等専門学校会計課長	管理会計課課長補佐 （13.3.26管理会計課管財係長から昇任）
〃	藤山 由弘	東京大学医学部附属病院医療サービス課課長補佐	管理部庶務課課長補佐
〃	佐藤 千恵	東京大学総務部総務課会館掛長	管理部庶務課専門職員
〃	櫻田 芳男	東京大学情報基盤センターシステム管理掛長	管理会計課情報処理係長
〃	尾道 雅英	東京大学学生部厚生課保健掛主任	管理会計課用度係用度主任
〃	佐藤 崇	文部科学省大臣官房政策課情報化推進室情報システム第一係員 〔転 入〕	管理部庶務課庶務係員
13. 4. 1	西山 義昭	管理部長	群馬大学総務部長
〃	菅原 浩	管理会計課課長	高知医科大学総務部会計課長
〃	砂田 健一	管理部庶務課課長	東京大学生産技術研究所総務課人事掛主任
〃	菊地みつ子	管理部庶務課専門職員	東京大学施設部企画課総務掛主任
〃	平野 光敏	管理会計課情報処理係長	東京大学情報基盤センターシステム管理掛長
13. 7. 16	柏原 晋司	管理会計課管財係長 〔館内異動〕	高知医科大学総務部会計課出納係出納主任
13. 4. 1	長津 昭	管理部庶務課課長補佐	管理部庶務課人事係長
〃	黒瀧 裕	管理会計課管財係長（併任）	管理会計課課長補佐
〃	高島 津雪	整理閲覧部情報サービス室受入係長	整理閲覧部情報サービス室情報サービス係長
〃	中村スミ子	整理閲覧部情報サービス室情報サービス係長	整理閲覧部情報サービス室情報参考普及係長
〃	鈴木 一正	整理閲覧部情報サービス室参考普及係長	整理閲覧部情報サービス室情報受入係長
〃	神谷 真司	管理会計課経理係経理主任	管理会計課経理係員
〃	篠崎 勲	管理部庶務課共同利用係員	管理会計課総務係員
〃	宮腰香代子	管理会計課総務係員	管理部庶務課共同利用係員
〃	野村 龍	管理会計課用度係員	管理会計課経理係員
13. 7. 16	黒瀧 裕	管理会計課管財係長（併任解除）	管理会計課管財係長（併任）



## 閲覧室利用案内

マイクロ資料目録データベースの検索サービスが新しくなりました。

8月より標記の検索サービスが新システムで再開しました。その概要と接続方法について簡単にお知らせします。

### 概要

このデータベースは当館が作成している古典籍の目録データベースのうち、当館が所蔵しているマイクロ資料の目録データベースです。現在、約166,000件の目録情報を収録しています。

新システムでは、利用方法がコマンド方式から利用しやすい方式に代わりました。漢字による検索や中間一致、絞り込み検索等もできます。また、特定の項目を除き、全項目の検索もできるようになりました。

### 接続方法

インターネットのブラウザで下記のURLを指定してください。

<http://base1.nijl.ac.jp/~wakosho/>

当館のホームページ (<http://www.nijl.ac.jp/>) から利用できます。〔データベース〕をクリックし、〔マイクロ資料目録〕を選択してください。

初めての方は検索画面右下の〔利用のしかた〕をクリックしてください。利用方法が表示されます。

## マイクロ資料目録の検索

当館が所蔵しているマイクロ資料の目録データベースです。

資料種別 マイクロ資料

検索実行

検索項目

書名

両方

中間

著者名

両方

中間

刊年

両方

中間

全項目

オプション

刊写の別

全

サービス区分

全

所蔵者名

\* 単独では検索できません。書名等と組み合わせて検索してください。

検索結果の表示件数 50件 (1ページあたり)

リセット

☒ 検索上限のあり

利用のしかた

ご利用いただいてのご意見をお待ちしています

## 平成13年度 秋・冬季学会

①事務局 ②開催日 ③会場  
(詳細は当館ホームページ参照)

- 歌舞伎学会 ①〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学演劇博物館内 03-3203-4141内線71-5936 (月曜午後のみ) ②12月8・9日 ③梅花女子大学
- 訓点語学会 ①〒155-0032 世田谷区代沢1-20-10 fax03-3487-4891 ②10月19日 ③福井大学
- 計量国語学会 ①〒167-8585 杉並区善福寺2 東京女子大学3号館3118号室内 03-5382-6339  
②9月29日 ③学術総合センター
- 国語学会 ①〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学文学部国語研究室内 03-5841-3813 事務取扱 〒113-0033 文京区本郷1-13-7 日吉ハイツ404 03-5802-0615 ②10月20・21日 ③福井大学
- 上代文学会 ①〒142-8602 品川区大崎4-2-16 立正大学文学部906 (近藤) 研究室内 03-5487-3286  
②10月13・14日 ③跡見学園女子短期大学・法政大学
- 昭和文学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町2-2-5 笠間書院内 03-3295-1331 ②11月17日 ③武蔵野女子大学
- 全国大学国語教育学会 ①〒680-8551 鳥取市湖山町南4-101 鳥取大学教育地域科学部内 0857-31-5083  
②10月20・21日 ③長崎大学教育学部
- 全国大学国語国文学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町1-3-1 (株) おうふう気付 03-3294-0857  
②12月1~3日 ③万葉文化館 (奈良県明日香村)
- 中古文学会 ①〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1 明治大学文学部日向研究室内 03-3296-2194  
②10月20・21日 ③九州大学文系キャンパス
- 中世文学会 ①〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学文学部石川透研究室内 03-3453-4511(代)  
②10月6~8日 ③京都精華大学
- 日本演劇学会 ①〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学文学部芸術学科演劇研究室内 fax042-739-8093  
②11月24・25日 ③大阪市立大学
- 日本音声学会 ①〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本学会事務センター内 03-5814-5810  
②9月29・30日 ③神戸海星女子学院大学
- 日本歌謡学会 ①〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学10号館904号宮岡研究室内 078-431-4341(代)  
②10月27・28日 ③甲南大学
- 日本近世文学会 ①〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1 明治大学文学部原道生研究室内 03-3296-4545  
fax03-3296-4349 ②11月3・4日 ③立命館大学
- 日本近代文学会 ①〒102-8357 千代田区三番町12 大妻女子大学文学部国文研究室内 03-5275-6074 事務取扱 〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本学会事務センター内 03-5814-5810  
②10月27・28日 ③名古屋大学
- 日本言語学会 ①〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 075-415-3661 ②11月17・18日 ③九州大学
- 社団法人日本語教育学会 ①〒101-0065 千代田区西神田2-4-1 東方学会新館 03-3262-4291  
②10月6・7日 ③立命館アジア太平洋大学
- 日本児童文学学会 ①〒567-8578 茨木市宿久庄2-19-5 梅花女子大学谷悦子研究室気付 0726-43-6221(代)  
fax0726-43-7997 ②10月26・27日 ③北星学園女子短期大学
- 日本社会文学会 ①〒840-8502 佐賀市本庄1 佐賀大学文化教育学部日本・アジア文化講座 0952-28-8221  
②12月1・2日 ③韓国・慶州大学校
- 日本文学協会 ①〒170-0005 豊島区南大塚2-17-10 03-3941-2740 ②11月17・18日 ③青山学院大学
- 日本文学風土学会 ①〒102-8336 千代田区三番町6 二松学舎大学文学部国文学科研究室 03-3261-7406  
②11月24日 ③和洋女子大学国府台校舎
- 日本文体論学会 ①〒110-0004 台東区下谷1-5-34 三修社内 03-3842-1711 ②11月16・17日 ③近畿大学
- 日本方言研究会 ①連絡先1 〒192-0397 八王子市南大沢1-1 東京都立大学国語研究室内日本方言研究会幹事 0426-77-2135 連絡先2 〒115-8620 北区西ヶ丘3-9-14 国立国語研究所気付日本方言研究会幹事 03-5993-7630 ②10月19日 ③福井大学
- 俳文学会 ①〒184-8501 小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学教育学部言語文学第一学科嶋中道則研究室内 042-329-7243 ②10月13~15日 ③佐賀大学
- 萬葉学会 ①〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学文学部国語・国文学研究室内 06-6605-2413、2414 ②10月27~30日 ③筑波大学
- 紫式部学会 ①〒230-0063 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学文学部日本文学科研究室内 045-581-1001内線242  
②12月8日 ③学習院大学
- 和歌文学会 ①〒156-8550 世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部国文学研究室内 03-5317-9706 fax03-5317-9219 ②10月26~28日 ③関西大学
- 和漢比較文学会 ①〒228-8533 相模原市文京2-1-1 相模女子大学国文学科矢作研究室内 042-742-1411  
②9月22・23日 ③相模女子大学